

＜若手の会＞活動報告

日本家政学会若手の会は1996年に発足し、今年で19年目を迎えた。本年は「被災地の活動に向き合う一家政学研究者にできること」と題し、講演会を企画した。大会1日目の5月23日（土）9:20~10:50いわて県民情報交流センターアイーナ7階B会場にて開催され、参加者は21名であった。

本企画の目的は、第67回大会は東日本大震災後、初めて東北で実施される大会であるという意義を鑑み、「震災後東北でどういった活動が行われてきたか」、に学ぶことを目的とする。現在、学会には会員だけでなくあらゆる人や地域に開かれた活動が求められている。今後「体験型」、「双方向性」の活動のヒントを得る企画としたい。そこで、数々のワークショップを実践されてきたビルド・フルーガス代表 高田彩氏をお招きし、学ばせていただく機会を設けた次第である。今回は、若手の会代表の挨拶（文化学園大学 柚本玲）、若手の会の報告（大同大学 棚村壽三）に続き、講師の高田氏にご講演をいただいた（司会：東北生活文化大学 小野寺美和）。その後、質疑応答の時間を取っていただき、参加者からの様々な質問にご回答いただき、参加者一人ひとりが理解を深めた。

高田氏は塩竈市在住であり、ご本人も被災者となった経験をもつ。講演では、「生きるモチベーションを失うような状況であった」、「当たり前にあるものが失われ、カレーライスのような日常食がとても生命力を湧かせてくれた」、「被災地に外部の人が入り、新鮮さを提供することで被災者に喜ばれた」、「物資の段ボールにデザインを施し、味気ないものをインパクトあるものに変えた」、「仮設住宅の神棚を作成した」ことなど塩竈の被災状況と現場での活動を詳細にご紹介いただいた。その中で、「復興支援活動において、アーティストの限界を感じられたこともあり、家政学分野の研究者と交流が持てたら、もっと被災者の生活環境改善に取り組めたのではないか」といったことも述べられた。また、被災地で行った俳句をつくるワークショップから生まれた曲も聞かせて頂いた。この歌は仮設住宅で歌いつがれ、その集落のテーマソング的位置づけとなっているそうである。被災地でのアートプロジェクト活動を記録した映像も見せて頂き、フランス人アーティストが、取り壊すことになった建物にアートで記憶に残る建物とする（ジョルジュ・ルースアートプロジェクト）芸術面での活動をご紹介いただいた。

講演後の質疑応答では、「家政学会のような団体が現場で活動するひと達に協力するには何をすれば良いか」、「研究者と現場の支援者、アーティストと連携したりつながるのはどうすれば良いのか」との質問には、被災地の落ち込んだ気持ちから、着飾ったり、食べもので日常を取り戻すことができた。研究者としては現場で実験をする機会でもあるのではないかとコメントを頂いた。

「食物分野として、何が被災地で喜ばれるのか」との質問に対し、配給では白いご飯とパンが基本になっておりカレー、ラーメンのような日本人が好きなもの、具のある汁物がありがたかった」と回答された。また、活動は大きな力を借りてパブリックに伝えることが必要であり、例として大物アーティストと一緒に活動することで集客を得る、それにより多くの人と出会うことで価値が生まれる、といったことや被災者の五感を日常に呼び戻すことが大事で、支援する際もその点を踏まえて考えるべきではないかといったことが述べられた。

今回、震災後の東北でどういった活動が行われてきたか、講演から学ばせていただき、家政学研究者として何ができるか、若手研究者一人ひとりが考える貴重な機会となった。今後も家政学研究の発展のための交流の場となるように、若手の会の活動を推進していきたい。

なお、アンケート結果の詳細および若手の会の活動については、日本家政学会若手の会 HP (http://www.geocities.jp/kasei_wakatenokai/) 上に公開している。

（若手の会幹事一同、 文責・棚村壽三）